

ちょっとひとこと 1

吃音者にとって手話とは？

先日、言友会の定例会で、講演会がありました。東京都障害者福祉センター職員でろう者の野沢克哉さんの講演です。

まず、私自身が手話を学ぶ中で、ろう者の抱える問題をかなり理解しているつもりだったのですが、実生活上のことを何も知り得ていないということを痛感しました。もっと交流を深め現実に根差した運動をしていかねばとの想いを改めて抱きました。

さて、最近若いう者を中心に、日本手話を言語としてとらえたところで、その手話を自らの文化としての誇りをもち、日本語対应手話とごちゃまぜになっている伝統的な手話（日本手話）を見直し、日本手話を自分たちの第一言語として広めようという動きがあるのですが、野沢さんの話は、単にこの想いが若い人達だけでなく、年配の人達にも通じる想いなのだと理解できました。野沢さんの話には、ろう運動のラジカル性をあらためて感じました。詳しい内容には、ここで踏み込みません。

ここでとりあげるのは、野沢さんの「言語障害者も手話学び、積極的にコミュニケーションの方法として取り入れたら 」という提起です。私自身「吃音者の問題とは、言語規範の逸脱ということでの差別の問題であり、その言語規範とは、音声言語で意志を伝えるということと、その音声言語の流暢性の問題としてあるのだから、そもそもその規範自体を問題にしていく必要があるのではないか 例えば手話で話すことにおいては、吃音の問題などない。」ということを主張してきました。そして、実際手話を学ぶ中で、心ひらかれる思いをしてきたのです。しかし、今回の話では、ちょっと話が違うのではないかという想いを抱きました。それは、同行された手話通訳者の「脳性マヒ（CP）の障害者で言語障害のある人でも手話で話している人がいる。吃音者も手話を使ったらどうか 」という意見にも通じることです。脳性マヒの障害者と言っても腕を動かすこととしゃべることのどちらが得手－不得手かということで、しゃべることの方がむしろ得手な人、「機能的に」手話ができないという人もいます。もちろんオルタナティブの問題で、自分が良い方を自由に選んでいくということの問題です。しかし、そもそもそこでいう「自由」が必ずしも自由ではありません。どちらがスムーズかで、スムーズな方を強いられるという問題がそこにあります。どちらがよりスムーズかということで問題を立てること自体が問題になります。そこに障害者の根源的な問題があり、そこをどう解決していくのかを問わねばなりません。例えば、「言語障害があり」かつ手話が困難なCPの人達との連帯ということを見ると、むしろ手話で話すということを選択するよりも、音声言語でどもりながら話し、聞き手に待つという気持ちを作っていくということが必要になるのではないかと思います。

その上で、オルタナティブなこととして手話を学び使っていくことを考えていくことが必要になるのではと思います。もちろん現在の手話通訳制度では、手話を学んでも吃音者が手話通訳を自由に使う、手話を学ぶことによって「有利になる」という手話の普及にま

で、至っていません。ろう者にとっても、手話がシムコム（日本語対応手話もしくは、日本語対応手話とごちゃまぜになった手話）になっているというのは、そこに差別があるからだし、また、音声言語と共に手話で話さなければならないような（今回の講演もそうでした）、差別の現実とその現実の中での手話通訳制度の不備がそこにあるのではないかと想います。そこに、オルタナティブな途を切り開いて行くということで、ろう者と共に、手話通訳制度の充実と手話の普及をになっていくことも考えねばなりません（かつてアメリカ先住民の部族間のコミュニケーションは手話でした。エスペラント語は、ほぼ破綻しましたが、国際手話は普及してきているし、手話は国や地域が違ってもしっかり通じるという面をもっています。共通言語になりえるということでの普及の可能性ももっています）。

手話を学んだ上で、実際にどういう場面でどう手話を使っていくのかということは、対象者の問題で、言語障害者がいれば、むしろどもりながらも話し、言語障害者の連帯を求めつつ、皆の中に待つという姿勢を作っていくことが必要なのだと想います。もちろん「オルタナティブなこととして話し手の意志や気分でそのときその時の選択で」となるのですが、現実的にそこに差別がある時に、その差別ということにどう対峙していくかが、第一の問題としてあるのではないかと私は想います。

今回の講演の中での手話の勧めは、もちろんこういう途もあるのだよという程度の、吃音者が「音声言語で話さなければならない！」ということに、とらわれていることをとらえての提起だったのだと理解しています。だが、そもそも差別に対峙していくという姿勢のないところで、このとらわれから抜け出せないとも想っています。手話を学ぶという中で、差別ということが明らかになって来るし、そこから開けることがあるのですが、その提起自体がどう届くのか、ということこそが問題なのですが、・・・。